

ドイツ民主共和国における 拒否的教養小説の影響力

——„Es geht seinen Gang oder Mühen
in unserer Ebene“ の成立とその後——

シュテファン・ヴント

この稿でドイツ民主共和国におけるある小説の運命を論じたい。この小説の扱われ方はいわゆるベルリンの壁がなくなる前の東ドイツの文化政策の代表的な例である。

この小説の作者 Erich Loest は1926年2月24日に Sachsen 地方の Mittweida に生まれた。1944年から1945年まで兵役についた。戦後になると、「Leipziger Volkszeitung」(Leipzig 市民新聞)の編集部員になって1950年からフリーの作家となった。しかし、1953年6月17日の反社会主義のデモの時、これは結局ソビエト軍隊の力によってつぶされてしまったが、その際彼は暴力的な事件に対して批判的な発言をしたためにドイツ社会民主主義統一党からきびしい警告を受けた。1956年10月、ハンガリーの独立運動の際、これもまた、結局ソビエトの軍隊に鎮圧されてしまったが、その時、東ベルリンの Humboldt 大学の反対グループに属していた Loest は、東ドイツの非スターリン化と Ulbricht の解任を要求した。そのあと1957年11月 Loest はまた反革命的なグループに参加し、逮捕され、7年半の刑を宣告された。彼は7年間悪名の高い Bautzen の刑務所に収容されていたが、釈放されてから彼はまた社会主義作家同盟に迎え入れられた。しかし彼の小説「Es geht seinen Gang oder Mühen in unserer Ebene」(「万事もとどおりに進んでいる」または「私たちの

平地の苦勞」)は、彼にドイツ民主共和国に生活することを不可能にさせた。そして1931年から今日に至るまで彼は西ドイツに住んで作家活動を続けている。

この小説は平均的な東ドイツ人の生活を描写している。主人公 Wolfgang Wülff は、野心のない有能な技師であって、生活についてある程度の水準が維持できれば、満足している。特に彼は平穩無事に暮らしたい傾向が強い。少年時代、彼はビートグループのファンであった時に警察犬に噛まれた。そして今でもこの体験は彼の心に持続的な精神的傷を残している。その時から彼は一番前に目立つより後ろに静かにしているほうが賢明と思うようになったのである。しかし彼の妻の Jutta は彼が出世することを望んだ。彼は彼女の希望に従おうとせず、彼らの結婚生活は不安定なものであった。水泳教室ではある父親は自分の怖がっている息子を強制的に水に投げ込む。しかし彼の妻も娘をそのように仕込んでいるのをみた時、彼の中に英才教育に対する反乱が引き起こされた。そしてその場面で彼は、あの父親はドイツ民主共和国の模範市民であってもファシストであると罵倒する。この侮辱の訴訟によって彼はある程度に寛大な罰であったが、彼の結婚は破綻する。そしてその後、Wülff は決定的に出世をすることを諦める。離婚してから彼は前の妻と違ったうるさくない新しい恋人を見つけ、彼女と結婚する。そして平々凡々にのんびり暮らす。

さて、この小説の一番大切な四つの場面をここでまとめてみる。

第一の場面は Leuschner 広場の戦いである。(G. S. 15-21)

60年代、Beatles が流行した時にビートコンサートを聞くためにティーンエイジャー特に一般教育総合技術学校の9年生と10年生はLeipzigのLeuschner広場に集まった。高校生はいなかった。とにかく進学組は集まらなかった。警察は道路から出て行くように500人の未成年者に命令した。しかし未成年者たちは言うことをきかず抵抗した。そのため警察のトラック、ジープ、放水車は広場を渡り、警察官たちはゴム製の警棒を持ってシェパートを連れだした。この時 Wolfgang Wülff は逃げたが、警察犬に追いかけて噛まれてしまった。その時、彼は自分が国家の敵だったと気が付いた。それまで、彼は国家人民軍と人民警察はドイツ民主共和国人をどんなことがあっても守らなければな

らないと確信を持っていた。これは彼にとってシュトロイゼクーヘンはおいしいとか、湯は100度まであたためると蒸発するといったことと同じように当たり前のことだった。しかし、この事件によって彼の心の中には国に対する疑いが生じた。

第二の場面は「国家権力に復讐」すること (G. S. 23-24)

Leuschner 広場の戦いの前までは、彼にとって世界はきれいに分けられていた。敵は西にいて、アメリカ人はベトナムを砲撃している。そして Kiesinger という西ドイツの首相はファシストであった。ところがドイツ民主共和国の犬はアメリカ人を噛むはずだったのに彼を噛んだ。この事件は彼に永遠の傷痕を残した。

そして、徴兵検査の時に彼は、権力を火傷した子供のように怖がった。皮肉をこめて彼は大将になるのはどのぐらいかかりますかと官吏に聞いた。これに対して、君の努力しただが少なくとも3年間はいなさいと言われ、「いいえ18か月で充分です」と彼は犬に噛まれた傷を思い出しながら答えた。

第三の場面は「出世拒否」である (G. S. 33-34) u. (G. S. 54-55)

彼の妻 Jutta は、彼に工学士になってほしかったので通信教育をするようすすめた。しかし自分の給料を少しぐらい高くするために彼は5年間勉強する気はしなかった。彼の妻は彼と彼の友人を比較して友人のようにならなければいけないとよく言った。しかし彼は出世をしたくないということを説明しようとした。そのため Leuschner 広場での国家権力の初体験、そして除隊の直前に彼にいやがらせをした中佐が彼を床屋に行かせたことを話した。工学士は普通の技師より50マルクぐらい高い月給しかもらえないのにと彼は言う。しかし Jutta はお金の問題ではないといった。彼女はそういうことをよく言った。結婚した時に彼女は4万マルクを持っていた。それで彼らは Trabant という車と住宅設備を買うことができ、新婚旅行はブルガリアに行くことができた。それと比較すると他の新婚夫婦はテレビを買うのにも苦勞して金をためなけれ

ばならなかった。「わかっている。おまえはあの当時4万マルクを持っていた。しかし私は9マルクと26プフェニヒしか持っていなかった。たしかにおまえの金で私はぬくぬくと暮らすことができた。」(G. S. 54)と Wülff は言った。しかし、それに答えて Jutta は「人間は自分の能力を伸ばす努力をすべきです。」といつも言った。彼は責任と権力を怖がっていた。彼は工場長にあまり興味なく平社員のままでいたかった。平社員でも工場の発展に協力することができるからである。Jutta は「私はあなたを尊敬に値する人として見たい。」(G. S. 55)と言った。そして Wülff は「おまえは私を雪だるまにして雪玉を私に投げている」と彼は言った。Jutta は「あなたのお母さんはいつもあなたを非常に満足していた。しかし私はあなたのことではいらいらしている。」(G. S. 55)と答えた。

次の場面は「水泳プールの中の調教」である (G. S. 130-134)

Wülff はある日、ある父親が彼の息子 Detlev を何回もプールに投げ込んで水泳を強制していることを観察した。子供は何回もプールサイドまで犬かきで行った、そして結局、吐いてしまった。Wülff はそれを見て耐えられなくなって、その父親の前に立ち、「その子供をほっときなさい」(G. S. 131)と叫ぶ。

最初、その父親は Wülff を次官かそれとも偉い党员と思ったが、Wülff が何の権力も持っていないと分かった時にその父親は「あなたには関係ない」と怒った。「この子供をほっておいてくれ。もう一度この子供を水に投げるとおれはあなたを水に投げる」と Wülff は叫んだ。水泳コーチは「そうするならば私はあなたを水に投げる」と Wülff に向かってはっきりいった。それから Wülff はその父親に怒鳴った、「お前はいまいまいしいファシストだ」と。それから少し冷静になって労働者のように「くそくらえ」と言った。(G. S. 132) Jutta に「あやまった方がいい」と言われた時に彼は「私はあやまらない」と頑固に言い張ったのである。

家に着いてから Jutta が謝罪の電話のための用意をした。「あの男は Feldig

博士という。彼は測定局で働いている。私は自宅と職場の電話番号を調べた」というわけである。

Jutta はもちろん電話する時間も約束した。場合によったら彼女は Wülff が言わなければならない言葉も教えるだろう。たとえば「尊敬されている Feldig 博士。けさのこと、私はとても申し訳けなく思っています。もちろん先生はファシストではありません。あなたはあなたの息子を水に投げる十分な権利を持っています。息子さんは先生のように大きく強くなるでしょう。もしかしたら彼も先生のように測定学の博士になるでしょう。たくましさは美德です。」(G. S. 134) とかいうセリフを用意しただろう。しかし Wülff は頭の中で「あなたの息子を吐き気を起こすまで訓練するのはばかばかしい。あなたは本当に豚野郎なのです。」(G. S. 134) と考えた。

彼は「私はあやまらない」と主張した。そして、それは Jutta との結婚生活の最後の夫婦喧嘩になったのである。(G. S. 134) 主人公はたしかに脱落者ではなかった、しかし彼は「勉強して勉強してでももう一度勉強」という社会主義国家ではどこにでも見い出せる Lenin の有名なスローガンの意味について深刻に考えるのである。

Loest はこの小説を Honecker 時代の始めごろ、1974 年に書き始めた。その時は文化政策上の緊張緩和の時代であった。Honecker は「社会主義の立場上からすれば、芸術と文学の中にタブーがあってはならない。」(Z. S. 5) と言った。これは Loest に社会批判的な本を書く刺激を与えたのであった。その頃は、20代の人々はたくさん、国家試験に合格して、技師、物理学者、医者、教師になった。彼らは一つの大きな難関を克服してから突然、刺激がなくなり万事、普通になってしまった。そして一定のポストにつくとあとはもう昇格の可能性はなく意欲も減退してしまっていた。

40代と50代の人ほとんどすべてのよい地位に付いていた。昇格したい人は何年間かの通信教育を受けなければならなかった。すべてにいきづまった平均的な男は結婚し、Trabant という車を持ち、新築住居に住んでいる。彼らの妻も仕事をしている。彼らはテレビと壁一面をおおうユニットたんすというス

テータスシンボルを持っていた、そして毎年、バルト海または黒海で休暇を過ごす場所をさがした。その中のある人たちは「年金まで何年」という不思議な記念日を作って祝った。そのような状況は一つの無気力を表している社会状態であった。

Loest は自由ドイツ労働組合の文化事務次官の所へ行って、ある国営企業を見学することを望んだ。この事務次官は Schkeuditz という国営企業を推薦した。そこでは鉄道車両の凝集体（冷却装置）が作られていた。かつてドイツ民主共和国の政策で国営の飛行機生産を始めようという計画にもとづき、この企業ができたのであった。飛行機の試作モデルは煙突にぶつかってしまい、東ドイツの政府は飛行機生産をあきらめ、これによって何億マルクも乱費されたのである。Loest は一般庶民の本音を聞きたかったが、いつも「万事もとどおりに進んでいる」(Z. S. 8) という言い回しを聞かされたのである。車のタイヤやおいしいビールを手に入れることはたしかに少し難しくても、しかし何とか可能だったから、そういう言い回しを人々は使ったのであった。

Loest は、Mitteldeutscher Verlag（中部ドイツ出版社）の Eberhard Günter 社長にこの小説について話した。小説の題名は「万事もとどおりに進んでいる」で、主人公はこの話の語り手である、と。しかし原稿を送ると、すぐその出版社から批判の答えが返ってきた。つまり Wülff は両極端の間に位置している。Leuschner 広場の戦いは一方の限界である。というのは、人は自分が好きなことをしようとする政治的な違反で警察犬に噛まれる。そして Wülff の上司 Grosser はもう一方の限界を示している。国家のために努力する人はいつも心筋梗塞の危険に瀕する。そうすると主人公にとって「二つの極端の間に行動したほうがよく、そして平静こそ市民の第一の義務だ」(Z. S. 11) という結論が生まれる。そうすると、この主人公は中途はんばでいくじがないから読者にとってあまり興味をひくものではない、という意見で出版社に批判された。

ライプツィヒ見本市の時に Loest はこの小説の原稿を西ドイツに送ることができた。Bertelsmanns 出版社は大きな関心を示し、Hessen 放送局は

彼をインタビューに招待した。ぎりぎりでビザが彼に与えられ、応じたインタビューは最初に社会主義作家同盟の会員として社会主義の作家の伝統に従う、という彼の言葉からはじまった。彼はこの小説の中でどのようにして普通の男がいろいろな事情によって国家権力と衝突し、帰り道がわからなくて、そして結局、「万事もとどおりに進んでいる」のような言い回しを口にする消費俗物になるかということを表したかったと、説明したのである。

そのあと中部ドイツ出版社から長い間、何の連絡もなかったので Loest は、Günter 社長に次のような手紙を書いた。「もし私の小説を発表する結論を出すことができなければ、私は西ドイツの Bertelsmanns 出版社にこれを持ち込もうと思っている」(Z. S. 17) と。しかしこの時 Günter はこの小説に対していろいろなイデオロギー的・美学的な強い疑問を抱いていた。しかも中部ドイツ出版は、この小説に対して初版刊行権を持っているから原稿を西ドイツの出版社に持ち込むことはできない、というきびしい返答をしてきた。

やっと半年後、1976年3月5日、彼は Halle の中部ドイツ出版社の審議協議会によられた。ここでは、この小説の主人公が官庁の権力によって消極的になり、責任を回避していること、そして、彼は壁を一面おおうユニットたんすとソファで満足する小市民になる結末に批判が集中した。Wülff の上司が過労で倒れることは、西ドイツの反ドイツ民主共和国に対してのプロパガンダに使われる。コーチと両親が子供を水に投げるのは、能力主義社会は非人間的だという印象を読者に与える。1人称小説は視野がせばまってしまうのもう一度3人称小説によってこの小説の芸術的資質を高めなければならない。社会主義リアリズムの立場から、作家は否定的な主人公に対し、もっと社会に肯定的な人物を対立させなければならない。Wülff の妻はそういう役割を演じると思われるが、その面でもこの期待をうらぎっている。これらの理由から中部ドイツ出版社は契約をすることができないと言うことでした。

しかし一方、Leuschner 広場での警察犬に噛まれた事件は事実であって、このことは前もって会議でその調査がされていたので批判はなかった。Wülff のような人間は、東ドイツにたしかに存在すると中部ドイツ出版者の人々は認

めたが、ドイツ民主共和国の30年の立派な成長における代表的な人間ではないとされた。だからこの作品は出版するべきではないという結論がこの会議では出たのである。

このため中部ドイツ出版社がこの小説を断るだろうということを Loest は予想することができた。彼は原稿審査係 Hottas がすでに出版に拒否的な返事を書いているという噂も聞いた。その上に中部ドイツ出版社以外の原稿審査係は否定的な評価を書くことを頼まれた、とも聞いた。中部ドイツ出版社は Loest に断りの手紙を出そうとしていたのであった。

ちょうどその頃、ソ連が急に灯油の値を上げ、そのためドイツ民主共和国は苦しまなければならなかった。出版の関係では紙のストックはだんだん少なくなり、靴と皮製品とシーツの値段も上がり、車のパーツは以前より少なくなった。しかし一方 Loest は金銭上の心配がなかった。というのは、彼の小説は西ドイツで発表され、振り替え小切手でその印税を得た。彼はインターショップでコーヒ、チョコレート、かん詰め、電気ストーブ、セーター、ドレス、電気かみそりを買うことができた。彼は自分が金持ちだと思えることができたのであった。

1976年9月 Loest は、有名なラジオドラマ作家 Joachim Nowotny (のちの作家同盟の副会長) が出版社から頼まれた、彼の小説への拒否的な評価を書くことを断った、と聞いた。そして評論家 Klaus Walther, ドイツ社会民主統一党の県長員はこの小説を発表するように求めた。彼はその中で Wülff の話に解釈する語り手を導入することを Loest にすすめた。しかし Loest は皮肉をこめてある所で脚注をつける、つまり「Wülff はここで間違っている、不完全な階級意識、労働者階級の力に対しての信頼が足りない。」(Z. S. 24) というような脚注をつけた方がいいと返答している。

Walther は、この小説の中の年寄りの党员 Huppel が Wülff の俗物的な態度を批判し、昔の労働運動の理想を彼に説く場面の追加をすすめてきた。Loest は妥協して、いろいろな所を手直した。

しかし1976年11月17日、Wolf Biermann の国籍はく奪事件によって東ドイ

ツの文化政策はまた厳しくなってきた。Biermann は Köln のコンサートの時にドイツ民主共和国の評判をだいぶ落とした。そのため労農国家の市民ではないということになった。その後、12人の有名な作家たちはこの処置を考えなおすように国家評議会議長 Honecker に申し入れたが、Loest はこの運動に参加しなかった。

1976年11月23日、Günter 社長は Loest を契約書を持って訪ねてきた。契約によるとこの小説は12万2千冊で出版され、そして Loest は印税として売上の15%を貰うことになるというものであった。

Biermann の事件について Loest は「国籍をはく奪する」という言葉はナチの時代から非常に悪い響きがあると言った。Günter によると「もし Biermann がドイツ民主共和国に帰ってきたら裁判によって刑務所に入らなければならないのはめになるだろう」ということであった。しかしこれに対し、Loest は「東ドイツでは緊急な問題を充分議論ができないから、作家たちは東ドイツの外で自分の意見を一生懸命に聞いてもらうようにする」と答える。(Z. S. 26) しかし彼は、Biermann 事件についてあまりはっきりした態度をとらなかった。それでも Biermann の事件のために原稿の発表はまた遅れた。国家とドイツ社会民主統一党は作家のためにいろいろな処罰を考えた。つまり政党除外、テレビと放送局からのしめだし、強制的な兵役、逮捕、西ドイツへの国外追放、などである。

1977年4月、また Günter から連絡があった。つまり、小説の内容についてお互い、一致することができれば小説の発表ができる。ということだった。たとえば次のように、「警察は自分の勝利を自慢しないほうがいい。権力はいつでもだれかに対して使われている。権力を使う人は権力を受ける側の人をよく見つめなければならない。」(Z. S. 27) と小説の中で Loest は書いた。しかし Günter の言うところによれば、社会主義では迷っている未成年たちに対して権力を行使しない。責任と権力は別なことであるとなり、そして主人公は娘を連れて党書記の家を通りすぎ、犬に尻を噛まれた傷を彼に見せたかったという場合は抹殺し、また Leuschner 広場の戦いの前、「静かなドン」の映画

のような場面、これは市民戦争のような色が濃いのでこの部分は、全部書きかえる、ということであった。

その後、Günter はこの本はクリスマスの前に発表される、と言った。しかし残念な事にこの努力はむなしく、紙のストックが少なくなったという理由でこの計画は実行されなかった。ライプツィッヒの秋の見本市で Loest は Stuttgart にある Deutsche Verlagsanstalt (ドイツ出版社) の Böcker 氏と知り合った。彼は以前から、東ドイツの作家を大々的に売り出したかったので中部ドイツ出版社の許可を得て「万事もとどおりに進んでいる」の 3,000 冊を出した。Loest は Osnabrück 大学の独文学の Heinrich Mohr 教授に朗読に招待され、Deutschlandfunk (ドイツ放送) で彼は書き直した Leuschner 広場の戦いを読んだ。

そして、その半年後春の見本市の前に、Loest は Günter から電話をもらった。彼は、Loest の朗読をすでに聞いていた。彼はこのことに批判的であった。一方、Loest はこの小説は西ドイツに売る正当な許可を得たから、自分の小説のために宣伝することはあたりまえのことであると答えた。そしてようやく 1978 年の始めに彼の小説は東ドイツでも出版された。東ドイツ版は黒黄色であって、西ドイツ版は黒白であった。Auerbachs Keller (Faust で有名な Auerbach 地下室) の近くの本屋で Loest は自分の本のサイン会を開いた。祝賀客は花とシャンペンを持ってきて、Karl-Marx Stadt のザクセン方言を練習した。Loest はこの地名を小説の中で「Gormorgsstodd」(Z. S. 34) と書き換えた。

この本の評価は好評であった。ある一人の作家は次のように書いた、「この本には国の秘密は暴露されていないが惨めさは徹底的に描写されている。このようにいいかげんな妥協をしない本は初めてだ」。(Z. S. 35)

また、Leipziger Volkszeitung (ライプツィッヒの市民新聞) は次のように書いた。「Wülff は英雄ではないので、無能な人になるのだろうか。この小説の鍵は『愛している人は傷つきやすい』という文章である。Loest は人間を愛している。人間に対して不正があった場合、または人間に十分な権利が与えら

れなければ Loest は傷つく。この小説はたしかに読者に勇気を与えない。その代わりに、もの悲しい気持ちをもたせてしまう、そのため読者を困惑させる。」(Z. S. 35)

もう一人の作家は次のように書いた。「Loest の主人公、言葉、ストーリーは非常にうまくできている。安いワインで酔っている人の言葉遣いや、壁一面をおおうユニットたんすを欲するという型にはまった考え方は私にとって悪夢である。エロチックな場面を読んでも、そのむなしさは消せない。」(Z. S. 36)

Südfunk Stuttgart「南ドイツ放送局」はこのように評した。

「この小説に出てくる人たちには愛と憎しみがあっても、Loest 自身は愛をもってこのストーリーを語っている。小説のなかには今までドイツ民主共和国で印刷されることができなかつた政治的な文章がはいっている。なぜ、元囚人 Loest はこのようなことを書くことが許されたのだろうか。しかしこの小説の終わりには、読者はこの本が国家に対して非常に重要な役割を果たしていると思うことだろう。この小説はある程度の小さな幸せをあらわしている。この技師 Wülff は権力への参加は望んでいない。もし彼はそれを強制されると敵意を持つ。彼はある程度の自由があれば忠実なドイツ民主共和国の市民として働き、暮らすことができる。国家はそのような人間を必要とする。この小説はドイツ民主共和国国民のための日和見的な公言でもあるし、彼らに対しての鋭い皮肉であるかもしれない。」(Z. S. 37)

小説が出版されて10週間目、「次の版は禁止になった」と Günter が言ってきた。「その理由は、主人公が空想の中で国家評議会議長と話したこと、その空想の会話の中で、Honecker が汚れた自由ドイツ青年同盟の青いシャツを着てという侮辱的な表現を用いたためであった。もしこのような場面を少し柔らかくすれば発表の可能性はまだある」と Günter は伝えた。(Z. S. 39)

「もし西ドイツの新聞記者が第一版とみごとに書き直された第二版を比較するなら、彼らにとって社会主義批判をあおるニュースとしてこれはまさに棚からぼたもちの材料となる」、また、「もし22,000冊の出版がだめになれば契約どおりその分の保障金はもらいたい。」(Z. S. 40) と Loest は Günter に言っ

た。

この時、友人たちは「この小説の第一版が出版されたことはこの国にとって一つの奇跡であり、たとえ第二版が出版されなくても、それは当然の事だろう」と、Loest を慰めた。

それから Loest の小説は非常に厳しく批判されることになった。ひとりの評論家は次のように書いた「現代のテーマについて書くと作家は国家と政党に対してはっきりした立場を持たなければならない。Loest はあいまい不明確な立場を持っているから、このようなストーリーは当然な結果である。この内容のあいまい性は作家のジレンマである。Wülff のようなタイプは確かに存在しているがそういう人間を文学的に描写することは有意義だろうか。特にこの主人公は小説の中で全然発展性を持たないのである。」(Z. S. 42)

Loest は Günter に次のように書いた、「あなたは出版禁止の結論を出さなければならない。しかし、そのことをだれに命令されたかを言うことはできないのですね」。(Z. S. 43) しかしそれに対して Günter は、「あなたは民主主義の中央集権制に理解をまったく示していない。そして国家の指導に対して疑いを持っている」。(Z. S. 43) と答えた。

さらに東ベルリンの文化同盟の Sonntag (日曜日) という雑誌の中にこの小説はさんざんに酷評された。この評価の著者は Neubert (文学教授) だった。「Wülff は Leuschner 広場の体験によって権力と権威に対して決定的な反感を持った。そしてそれは彼の人生哲学になる。このためこの本は権力と責任の問題についてくどくどと不平不満を述べている。発展を望まない男は、自分で作っている不満をいつもただ発散しているだけである。」(Z. S. 44)

ある作家は、この批判的な記事に対して Sonntag に次のような投書をしたが、この投書は公けにされなかった。「ドイツ民主共和国ではどんな芸術作品においても純粋な文学批判よりイデオロギーの成績の良し悪しの方が(その評価において)優先するといった公然の秘密がある。社会主義は宗教になった。すべてのドイツ民主共和国の作家たちは、社会主義と社会主義の歴史を愛さなければならない。教義の復活は啓蒙主義の時代の止揚にほかならない。」(Z.

S. 45)

1978年の夏、Rostockで毎年の本屋のバザーが行われた。そこではすでに廃版になった本も提供される。作家たちはいろいろなテーブルに座って本にサインをする。そこにはLoestの小説の最後の400冊があった。いつ次の版が出るかと聞かれた時にLoestは「決して出ない」ときっぱり答えた。

それから西ドイツの新聞では最初の評論が出てきた。Frankfurter Allgemeine Zeitungは次のように書いている。「この小説は、ある種類の国家に関しての不愉快な気持ち (Staatsverdrossenheit) を表現している。Loestの若い主人公は静かに不満を持っている。それは西と東の社会の発展の大きな違いである。結局、この小説にはどのような解決策があるのか。実際はない。Juttaは新しい主人を見つけて、Wülffは新しい妻を見つける。そのあとも、万事もとどおりに進んでいる。Loestはこの小説によっていろいろなタブー、特に社会主義における社会の進歩的な発展という問題にふれている。」(Z. S. 47)

東ドイツではこの小説の反響はすごかった。特に「国家が文化組織の独立を許さないということ」が厳しく批判された。「文学作品は三段階で制御される。最初は多くの作家に内面化される、抑圧された自己検閲である。その次は出版社の原稿審査係の事前検閲であって最後に文化省の出版と本屋の官庁の審査がある。その大きな権力機構は新しい考えに長い時間フィルターにかけるから、これらの考えは新鮮さをなくしてしまう。特別の場合は無限の力を持った検閲係が現れる、つまりドイツ社会民主統一党の政治局。この検閲係はすでに許可されている本、またはすでに印刷されている本さえも止めることができる。その圧迫によって出版社も作家も社会批判的な本を出す勇気を失う。そうすると彼らは社会で発見した問題を避けるか、またはそれを美化する。ようするに作品は調和か美化である。かなりの数の作家は西ドイツで発表するために書くけれども、それはドイツ民主共和国の作家の使命をなくしてしまうのではないだろうか。要するに国家はこのようにして生まれた社会的批判を権力を行使することなく、もっと柔軟性をもって対応するべきだ。」(Z. S. 48-49)

1978年の夏、Loestは東ベルリンの著作権事務所に行った。Hamburgの

Hoffmann und Campe 出版は彼の短編小説を出したかったのである。幾つかは東ドイツの出版社で発表されたがまだ未発表のものが四篇あった。「東ドイツで断られるほどの作品でも西ドイツでは出版許可を得る可能性が大きい」(Z. S. 50) という情報を得たのである。そして次の訪問の時に彼は期待をもって Adolf 事務長に会った。しかしその時 Loest は予約なしで会いに行ったので Adolf に冷たく帰されてしまうことになる。

ドイツ連邦共和国公共ラジオ放送局連合体(ARD)の記者は、ドイツ民主共和国に住んでいる作家に彼らの状況についてインタビューを望んでいた。Loest もそのインタビューに参加を希望していた。しかしその記者はドイツ連邦共和国の外務省に呼ばれ、このようなインタビューは1973年の記者規定に違反していると言われたのであった。そして Loest の所には「ドイツ連邦共和国の作家について」(Z. S. 51) のインタビューは許可されないという電話が郡評議会(Bezirksrat) から入った。それから Loest の電話は何日間も交信不能になり、そのあと西ドイツの記者自身からインタビューの計画は中止になったという知らせがきた。9月1日、Loest は文化大臣の代理 Höpke に呼ばれた。Loest は社会主義の作家の一人でいたいのかそれとも東西論争で自分の利益だけを得たいかと聞かれたのである。Loest はこの質問に驚いて「あなたに社会主義の大臣のつもりでいるのかということなど私は質問することはない」(Z. S. 53) と答えた。それに対し「もういい。第二版を発表するかどうかは2週間たったら結論が出て来るであろう。」(Z. S. 53) とその会見は終わった。

一方、北ドイツ放送局(Norddeutscher Rundfunk) は彼の小説を評価した。ここにはまったく動かない世界がある。支配している人たちは支配された人たちを暴力やそしてむしろ物質的な褒美によって政治の影響への関心をうすれさせている世界である。この小説は国家市民の受動性の表現である。1949年、Wülff の生まれた年に亡命から帰ってきた Brecht は「私たちは山の苦勞を乗り越えたが私たちの前には、まだ平地の苦勞がある。」と書いたが、残念ながらドイツ民主共和国は平地に位置している。そしてそういう状態においては納得しない社会主義者たちは敵の扱いをされる。そのような世界がここにあ

るというのである。(Z. S. 54)

Deutsches Allgemeines Sonntagsblatt「ドイツ一般日曜新聞」には、次のようなことが記されている、「(社会主義で育ったドイツ民主共和国25周年記念)という本は33マルク、5ポンドの重さである。この本をだれでも自分の意志では買わない。もちろん Wülff も。それは表彰として立派な人に与えられる。Wülff は職場の上司の所でこの本をみつけページをめくる。その中身は旗と花を持っている人々がおり、Erich Honecker が家畜産業者に激励の挨拶をしている。年寄りの人たちはぴっぴっかしているきれいな老人ホームに座っている写真などがある。しかし、このような写真を見ながら Wülff はよく仕事の行き帰りにみかけた、ボロボロの家の中でコートを着て、首にマフラーを巻いていたある老婆を思い浮かべている。これは美化された公式の像に対する対極の像を作っている。」(Z. S. 54-55) このように評価されたが、2週間たっても Loest が小説を出版できるかどうかの知らせは来なかった。そこで彼は東ドイツの法律をあえて犯した。というのは彼は「Deutschland Archiv」(ドイツ文庫)のために書いている Osnabrück 大学の Heinrich Mohr 教授とインタビューをしたのである。そこで Loest は「どんな政治家もこの小説が『有益ではなく間違っている』とはっきり言わない。これに対しては私は答えることができるが、出版停止はどことはわからない闇から Kafka の小説の中の独立した機械装置のように私を襲ってくる。」(Z. S. 58) と言ったのであった。

この年の秋、彼は朗読会——東ドイツ各地で開かれ、政府の許可を必要とする——に招待されなかった。また、もし、招待されてもこれはぎりぎりになって断れたにちがいない。中央委員会(Zentralkomitee)からの直接の指導によると「Loest の小説は援助するべきではない」ということを彼はうわさで聞いたのである。

中部ドイツ出版は22,000冊の第二版を出すことを前に約束したが、すべての著作権を Loest に返すので第二版に対する責任はもう持たないと彼に通知してよこした。Loest は作家同盟の法律事務所で自分の権利を主張したかった

が、ちょうどその時に Loest はフランクフルト書籍見本市を訪問するためにぎりぎり間に合うようなビザを得ていた。

同時に「Frankfurter Rundschau」（フランクフルト展望）で批評が出た。

「主人公 Wülff は階級意識を持っているが、積極的社會主義者の模範ではないから東ドイツ当局は快く思っていない。彼はひ弱でががつがつしてない、そして彼は簡単に満足を得られる。彼は人目に立ちたくないが、そのくせいくじなしではない。Wülff は軽蔑された一般庶民意識のアレゴリーに見える。社会的な弁証法では人の抵抗を必要とする、ということが Loest のメインテーマである。Wülff の『怠惰』は道徳的に人間を墮落させられる『拒否』である。そして彼は新しい『のらくら者』（Taugenichts）である。」（Z. S. 61-62）

「Die Zeit」は次のように評した。

「社會主義の文学はよく道徳的な葛藤を医学的な問題、政治的な問題、技術的な問題に代えている。しかしこれは葛藤を見せるより隠す方がいいという通俗文学の成功した方法にすぎない。しかし Loest の場合はドイツ民主共和国の文学において、一般大衆の今まで存在しない解放の役割を果たしていることを示した。要するにこの小説は東ドイツでは許されていない議論の報告である。」（Z. S. 62-63）

このような評価を得てドイツ民主共和国の著作権事務所の許可なしに Loest は、Stuttgart のドイツ出版社の契約にサインしてしまった。それは犯罪を犯したことを意味する。こうした犯罪を犯した作家たちは罰金を払わなければならない、社會主義作家同盟から追い出されたのである。第二版を可能にするよう、Leipzig の作家たちは署名を集めた。しかし Loest は用心深く「それは無駄な努力です。権力を持っている人たちはこういう抗議を簡単につぶしてしまおう。」（Z. S. 65）とそれに答えている。

そのうちに Loest は学生たちから Karl Marx 大学の物理研究所で行われる朗読会に招待された。聴衆の中には著名な教授も含まれていた。彼は根っからのドイツ社會民主統一党黨員で、物理研究所の所長、国家賞受賞者であった。講義室は超満員で、ほとんどは黨員でうめつくされ、たくさんの学生が入ること

は禁止された。Loest が水泳教室と Leuschner 広場の場面を朗読した時に講義室はしんと静まりかえった。読み終わったあとの議論では社会学と人文学の助手と博士たちが討論を支配したのであった。彼らは国家と政党のはっきりした立場を代表しなければならなかった。彼らは能力主義社会拒否、権力拒否、責任拒否に対して Loest があまり自分の意見を出さないことを批判した。作家はすべての判断を読者に任せるのではなくて、小説の人物を指導しなければならないと論ずるのであった。彼らは肯定的な主人公と責任について議論するのであった。Loest は、この小説がいろいろな問題を明らかにし、このような議論を可能にしたからその面ではこの小説は有益であると説明した。この議論によってたしかに彼は新しいファンができたが、本屋は彼の小説を売ろうとはしなかった。

1978年の11月、彼はまた著作権事務所を訪問した。その時、所長 Adolf は Loest の小説を西ドイツで発表する許可を出すことができないと言い、彼は Loest の小説を読んではいなかったが、文学作品を評価するのは彼の仕事ではないと言うのであった。法律的な理由で Loest の作品は禁止されるのだという。この時、Loest はこの小説が社会主義に対して反逆的ではないと主張したが、Adolf は「私は知らない。しかし、西ドイツでの印刷許可を出すことはできない」と言った。作品がわからないのに許可を出さないということは不条理だと Loest は抗議したが、奇妙なことに Adolf は不許可の理由も法律の条項も言わなかった。そして社会主義の敵という問題についても話さなかった。「私はただの文化省の役人だから私はその指示に従うだけである」と彼は結んだ。(Z. S. 67)

その後に文化省の代表 Höpke は『万事もとどおりに進んでいる』の第二版が Rudolfstadt の Greifenverlag で出版できると Loest に知らせてきた。この出版社は Loest に10,000冊しか発表できない、それ以上はむりだ、しかしそのあとすべての著作権は Loest に戻すという約束をした。同時に Günter 社長は Loest の場合、政治的に非常に盲目的な行動をしたということでドイツ社会民主統一党から処分を受けた。そしてこの出版者の原稿審査係長 Hottas

は党書記のポストを失った。Loest は、10,000冊しか発表できないという事実は彼にとって不当だと思ったが、彼はこの契約にサインを望んだ。

そして朗読会の招待はもはや来なかった。それは作家と本のボイコットであった。なぜこの悪い状況でこの小説は発表することができたか。その時30~40人の作家は国家評議会議長に出版許可の請願書を送ろうとした。しかし作家同盟の会長 Hermann Kant は「作家たちの請願書は10,000冊の出版より社会主義の評判を落とすだろう」(Z. S. 72)と中央委員会の文化官庁に注意を促した。これにより結局、次のような条件で出版契約はむすばれることになった。①10,000冊だけ発表する。②10,000冊売れたら著作権は作者に返す。③Greifenverlag版は中部ドイツ出版社の版と同じものとする。(Z. S. 74)これによって出版の道が開かれた。

実はこの時 Honecker 自身は、この小説の中で「Wülff が5歳の娘に Honecker について話し、そして Wülff は空想のなかで Honecker と一緒に昔の自由ドイツ青年同盟のことを感激して話した」(G. S. 105-106)という部分が気に入らないという理由で、もうこれ以上出版を許可しなくなかったのである。

その頃、東ベルリンのドイツ連邦共和国常駐代表部の部長 Günter Gaus は西ドイツ外交官にこの本を送った。その結果東ドイツの本当の姿をこの小説は描き出しているということで、この小説の非常な反響が広がっていく。1981年、Neumünster 市の Fallada 賞はこの小説に与えられた。

1979年の春のライプツィヒ書籍見本市では Höpke が国として推薦できる代表的な2冊を紹介している。1冊は政治的なあてこすりもなく、その時代に関係しているものではなかった。もう1冊は Solschenizyn に対しての侮辱であった。Honecker の発言「文学の中にタブーがあってはいけない」(Z. S. 5)という時代の終りをそれらは示していた。

その頃、Stefan Heym という作家はドイツ連邦共和国で無断で小説を発表したため外国為替取引違反で罰せられた。Loest と他の7人の作家たちはそれに対して抗議した。このうちベルリンに住んでいた作家たちはすぐ作家同盟か

ら追放された。そのため Loest はそれ以後、ずっとおびやかされた状態で暮らすことになった。

Leipziger Volkszeitung (ライプツィヒの市民新聞) に、ある独文学の教授はこの出来事について書いているが、彼はそこでイデオロギー的な偏向主義者たちを精神病扱いにしナチ時代のようなことばを使った。「西側の悪い病気を移された人々（作家たち）を、健全な人々は自然に避けられるようになるだろうが、助けることはできない。また、たとえ彼らが死んでも彼らのことはいずれ忘れ去られていくことだろう。」(Z. S. 78) と。

その半年後、Loest は第三回目の除名を受けないようにと、ドイツ民主共和国の作家同盟を自分から脱退した。1981年から彼はドイツ連邦共和国に住む。1983年の秋、彼は東ドイツに帰らないと宣言した。その時、3年間の有効なビザを持ってドイツ連邦共和国に入国し、ドイツ民主共和国の市民として西ドイツに暮らした。

ドイツ民主共和国では、このようなビザを与えることによってうるさい人をやっかい払いすることができた。ドイツ民主共和国は Loest のような作家をとっくにあきらめこのような形で処分したのである。Loest はドイツ民主共和国の国籍をもっていたかったので、彼はビザの更新を申し入れた。しかしこの3年間のビザの有効期限がとうに切れ、そしてそれを更新することを断られた時、彼は東ドイツに帰る希望をすてた。しかし、彼はドイツ民主共和国からの逃亡者としての扱いをうけたくなかったのでドイツ連邦共和国の国籍も得ようとはしなかった。東ドイツでは、彼は言いたいことを言うこともできなくなったので西ドイツに住んだのだけれど。

すべての東ドイツの出版社は彼に著作権を返した。その後、西ドイツで彼が書いた本は東ドイツでは発禁となった。1983年、Loest は「ドイツ民主共和国の文化政策は以前と変わらない、むしろもっと厳しくなるだろう」と予想したのである。

1990年劇的変動の後の東西ドイツは統一をなし、以後このような運命にもて遊ばれる作家も、また作品も生まれることはないであろう。

参考文献

Erich Loest, Es geht seinen Gang oder Mühen in unserer Ebene, Deutscher Taschenbuch Verlag, München 1980 (これからの引用 G と略記する)

Erich Loest, Der vierte Zensov, Vom Entstehen und Sterben eines Romans in DDR, 1984 Edition Deutschland Archiv (これからの引用 Z と略記する)